

# お茶の間学 I

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp

## 民家再生

フォーラム in 佐賀を前に

築後約30年で建て替え期が来るといわれる近代的な木造住宅の一方で、100年たつてなお生き続ける伝統的な木造民家。その伝統的技術と考え方に魅せられ、九州大で建築を学んだのち、卒業後に大工の道を選んだ若者がいた。(佐藤弘) 上は10日掲載

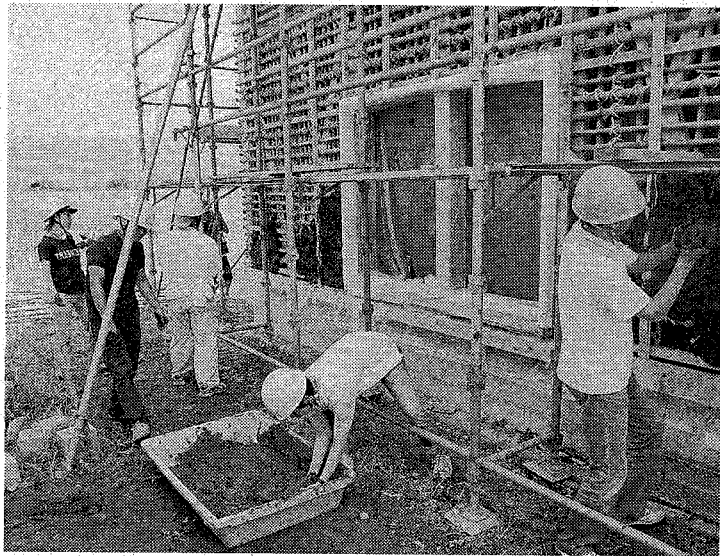
### ■大工の技術に驚嘆

「かつての大工は本気で100年もたそうと考えて住まいを造っている。そこが驚きだった」。1級建築士の資格を持つ大工の池尾拓さん(30)は言う。

九大卒業と同時に3年間で100人の大工を養成する国家的プロジェクト「大工育成塾」に入塾。伝統的工法の家造りを手掛ける福岡県朝倉市の建築工房「悠山想」に弟子入りし、材料運搬や掃除などの下積みから職人生活を始めた。6年



棟上げで梁(はり)を取り付ける池尾拓さん  
民家再生ワークショップで土壁を塗る参加者



## 温故知新で未来を築く

間の修業の後、九州産業大建築学科を卒業後、同じ道を歩んだ滝口亮太さん(31)と福岡県須恵町に工務店「住幸房」を構えた。池尾さんたちの心をとらえる大工の世界。それはく

き一つ打つにも、将来のことを考えるその精神と技術にある。温気との闘いともいわれる日本の家造り。くぎを打てば、その時点ではしっかりと固定されるが、金属は必ず温気を呼び、いつかさびる。つまり高温多湿の日本では、くぎを打つこと自体が住まいの寿命を縮めることにつながるわけだ。

「だから大工は温気のあるところには極力、くぎは打たない。もし打つときは、すぐに交換が可能なように、目に見える箇所に打つといった工夫をする。

木は湿度によって膨れたり縮んだりするから、木を組むとき、片方は固定しない。家は温気がこもらないよう風通しよく造る。どこにくぎを打つかなんて、設計図には書いていない。すべて現場の大工が決める。職人の技一つで家の寿命が変わる。これ、すごいと思いませんか(池尾さん)

「周回遅れの最先端」 「伝統的な民家には、最先端のメカニズムが詰まっている。いわば周回遅れの最先端なんです」。全国各

する気密化、断熱化で、エアコンを使って室内温度を調整するのが主流。前提となっているのは、機械的な強制換気システムの存在であり、それを動かすエネルギーがなければ成り立たない造り方ともいえる。逆に言えば、風通しを考えた伝統的な民家はそこに頼らずに造られているから、常に快適な環境が保証されているわけではないが、かつて扇風機があれば過ごせた夏が、エアコンなしに過ごせなくなった理由の一つがここにあるともいえる。

「古きを温ね、新しきに繋ぐ」をテーマにした「第15回民家フォーラム2012 in 佐賀」は11月23、24の両日、佐賀県鹿島市で開催される。

「古きを温ね、新しきに繋ぐ」をテーマにした「第15回民家フォーラム2012 in 佐賀」は11月23、24の両日、佐賀県鹿島市で開催される。

したあとの廃棄の問題。 「伝統か近代かの二項対立ではなく、伝統技術に現代の知恵を加え、夏涼しく冬も暖かい家をいかに工に造るか。それが現代に生きる職人の腕の見せどころ」と杉岡さんは力を込める。

地の古民家を訪ね歩いてきた製材業の杉岡世邦さん(43)は言う。 その一つが、下地に竹を組み、そこに土を練り込む土壁が持つ調湿性と蓄熱性だ。土壁は湿度が高くなると温気を吸い、低くなると放出するため、夏の蒸し暑さを軽減し、冬の乾燥を防ぐ。また、熱容量が大きいのでゆっくりと暖まり、ゆっくりと冷める。室内温度の変動幅が小さくなり、室内の極端な暑さや寒さが軽減できるという。

現在の住宅は外気を遮断

第15回民家フォーラム2012 in 佐賀 11月23日午後1時半から、佐賀県鹿島市納富分のエイブルホールであるシンポジウム「住まいと森の間にあるもの」で開幕。同2時半から、福岡県うきは市の新川・田箆地区の重要伝統的建造物群保存地区選定の経過報告。同3時からはトークライブ「三職人問答—わたしの道・伝統文化に魅せられて」で、1級建築士の北島智美さん▽池尾拓さん▽杉岡世邦さんの3人が民家の魅力について語り合う。24日は、水路沿いにかやぶきの町家が並ぶ鹿島市浜町が舞台。漁村集落の南舟津を地元ガイドの案内で見学する「浜宿ガイドツアー」▽木組み技術や棟上げの実演▽伝統木構造がわかる模型展示—などの体験型イベントがある。参加費はシンポ、浜宿ツアーが各1000円。問い合わせは日本民家再生協会—03(5216)3541。

